

第一次世界大戦と日本陸軍

——物量戦としての青島戦役——

片 山 杜 秀

- 一 はじめに
- 二 青島戦のイメージ
- 三 青島戦の実際

一 はじめに

陸軍技術審査部に所属する砲兵中佐、伊勢喜之助は、第一次世界大戦の青島要塞攻略戦に参加し、戦闘終了後、ただちに『青島攻囲戦ニ於ケル彼我兵器ノ状態及弾丸効力調査』をまとめた。青島戦の性質を解するための重要な一次資料と考えられるが、今日あまり知られていない。本稿は、この報告書に依拠しつつ、青島戦の実際を素描しようとするものである。

二 青島戦のイメージ

一九一四年夏、第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟の誼から連合国側に加わり、ドイツの東アジアに於ける根拠地で要塞化されていた、山東半島の青島を攻めた。

青島攻略戦に動員された陸軍部隊は、福岡県久留米の第一八師団、やはり久留米の第二四旅団や長崎県大村の第二三旅団、これが初陣となる陸軍航空隊などで、それらが独立第一八師団として編成された。人員規模は約三万人。総指揮官は第一八師団長の神尾光臣中将である。

青島要塞攻略戦とは、どのような戦いだったのか。従来の一般的評価は、日本軍としてはそれほど仕掛けな⁽¹⁾どがなくても勝利を収められた、取るに足らないいくさだった、というものだろう。

何しろ、戦いそのものよりも、そのあとでドイツ軍捕虜が大戦終了まで西日本各地の収容所で暮らし、中でも徳島県の板東俘虜収容所では捕虜に比較的に自由が許されて、様々な文化活動が行われ、地元住民との心温まる交流もあり、ついには捕虜の楽団がベートーヴェンの交響曲第九番の日本初演までなした、といった挿話の⁽²⁾ほ⁽³⁾うが、はるかに人口に膾炙しているくらいなのだから。

あるいは、青島戦は、アジアで初の航空機が用いられた戦いとして記憶されているかもしれない。一九六三年の東宝映画『青島要塞爆撃命令』は、加山雄三、夏木陽介、佐藤允らの主演により、複葉機が楽しげに飛ぶ、牧歌的な航空アクション青春物として撮られている。この映画の質が、日本人に語り継がれてきた青島戦のイメージを象徴するといってもよいだろう。

明治の凄惨な日露戦争と昭和のさらに凄惨な日中戦争や日米戦争とのほ⁽⁴⁾ざ⁽⁵⁾まで、いささか呑気に行われた、いかにも大正らしい戦争というイメージが、青島戦をめぐる言説につきまとっている。ベートーヴェンや牧歌的飛

行機を伴って。

実際、多くの戦史本が、青島戦役を格別どうということもない楽勝だったと叙述している。その一例として、戦後にも大きな影響力を持ったと考えられる伊藤正徳『国防史』（東洋経済新報社、一九四一年）の当該箇所を概観要約してみよう。

先発部隊の山田良水少将率いる旅団が山東半島の龍口に到達したのは九月一日。第一八師団主力が同じく龍口に上陸したのは一日。二六日、準備の整った日本軍は前進を開始。もう開戦後一カ月になるから、ドイツ軍の防備は強化されているものと考え、慎重に偵察を繰り返しての進撃だったけれども、ドイツ軍の抵抗は微弱で、二八日には、浮山から孤山にわたるドイツ軍防衛線の前面にまで進出する。

浮山は青島背面の東側、孤山は同じく西側の高地。浮山と孤山の先は青島まで、より高い場所はない。浮山と孤山からは青島が見下ろせる。ドイツ軍としてはこの二つの高地を占領したら青島防衛に重大な支障を生ずる。浮山と孤山は青島の生命線である。日露戦争時の旅順のロシア軍だったらここで徹底抗戦して日本軍を長期間阻止したに違いないと、伊藤は言う。

ところが日本軍の戦意が熾烈であったのに対して、ドイツ守備軍のそれは甚だ低く、日露戦争の旅順の二〇三高地に相当する浮山は弱すぎて話にもならず、たちまち陥落する。ただちに日本軍は青島総攻撃のための準備に入ったけれども、「途中豪雨に見舞われたため準備に手間どり、万端整うまでに一カ月もかかってしまった。

総攻撃開始は一〇月三十一日。まず砲撃によってドイツ軍の士気がますます低下するのに乗じて、日本歩兵は果敢な夜間攻撃を試み、防衛第一線を突破し、明治天皇の誕生日の十一月三日には防衛第二線を制圧。六日には青島市街への突撃戦が策定されるに至った。この間、ドイツ軍の抵抗はあまりに微弱であり、日本軍の士気の緊張は圧倒的であったから、突撃陣地の構築さえ不要であった。ドイツ軍は総攻撃開始から約一週間で降伏し、青島

戦はあっけなく終了した。

伊藤に従えば、大概以上のようなのである。慎重に時間をかけたが、青島のドイツ軍は戦意不十分ゆえにさしたる苦労はなく、その戦闘は、日本軍にとって特別な教訓を与えるものではなかった、という筋書きになる。日本軍の精神力、突撃精神が、ドイツ軍を圧倒し去ったという物語である。

にもかかわらず、時間はかかりすぎている。浮山と孤山の防衛線は九月末に破っている。そのとき第一八師団は青島の死命を制したといえる。引き続き突撃すれば、青島はたちどころに陥落したであろう。それなのに、総攻撃まで一か月もあいた。雨に災いされたといっても、長すぎるのではないか。指揮官の神尾は「慎重將軍」、神尾の作戦は「慎重作戦」と言われた。臆病な采配のせいで、いくさが長引いたと考えられた。その印象のちのちまでのさまざまな歴史叙述に反映している。

三 青島戦の実際

だが、以上のイメージは本当なのだろうか。やはり肝腎な点が抜けている。あるいは強調されていない。簡単に結論を先取りすれば、実は青島では、歩兵が突撃し、砲兵が支援する戦争ではなく、砲兵の火力でほとんどかたをつけてしまい、歩兵は後始末に行くだけ、といったかたちの戦争が試みられたのである。火力の強いほうが勝つ。弾の多いほうが勝つ。白兵戦や突撃戦ではない。遠距離から物量で圧倒しようという戦争。砲兵が主で歩兵が従。近代戦の手本を、日本陸軍が初めて試したのが青島戦であったと言える。

このへんの事情に端的に触れた戦史本が、伊藤正徳の『国防史』の二年後には刊行されている。桑木崇明陸軍中将の著した『陸軍五十年史』である。肝腎なくだりを引く。

青島要塞の攻略に就て、我が軍の策定した作戰方針は大体次のやうであつた。

我が軍は第一八師団、野戦重砲兵一連隊（一五センチ榴弾砲）、攻城部隊若干を基幹とする独立一師団を以て海軍と協同して青島要塞を攻略する、これが為め野戦部隊の主力を山東省北岸の龍口に揚陸し、その即墨付近進出の後、重砲その他の諸材料を勞山灣付近に上陸せしめ、先づ孤山、浮山の敵の前進陣地を奪取し、次で本防御線を攻略す、而して要塞攻撃の方法は坑道作業を行はない如く計画する、といふのがその方針であつたが、その後欧州方面戦況の進展上の顧慮から、一層速やかにこれを攻略せしめんことを企図し、二八センチ榴弾砲六門、一二センチ榴弾砲二四門、鐵道連隊、工兵獨立大隊各々一個を新に師団に増加し、その大部は第二期輸送部隊と共に、又二八センチ榴弾砲は火砲整備の關係上、爾後これに続いて勞山灣に輸送することとした。⁽²⁾

要するに、攻略戰計画の最終段階で、作戰方針が、当初の歩兵突撃を主とし、それを一五センチ榴弾砲による砲撃で援護する程度の「前近代戰」から、より大口徑で破壊力の大きい二八センチ榴弾砲、それから桑木の文章からは落ちているが、四五式二四センチ榴弾砲等を並べ、砲撃で青島要塞を一氣に圧倒して、短期日でけりをつける「近代戰」へと、轉換されたのである。それに伴つて巨大砲を運搬し、陣地を設営するための工兵部隊と鐵道部隊も新たに動員された。一カ月はそのために必要であつた。その時間を顧慮しても、ほどほどの火力援護による歩兵突撃よりも、確實に計算可能な速やかな日程で、青島は攻略できると考えられたというのが、桑木の理解である。拙速に歩兵突撃をして失敗をくりかえせば、日露戦争の旅順のように泥沼化しかねない危惧もあつたわけだろう。

こうして青島は、日露戦争後の日本陸軍近代化のほどを試すための実験場となつた。歩兵突撃の時代は既に終

わった、今後は火力の時代で、どれだけ砲弾を打ち込めるか、大砲の数と性能と砲弾の補給量が勝負を決めるという「近代的認識」が、青島戦での日本陸軍の主調であった。そう考えることができる。

ここで、青島要塞を狙って、前面の砲兵陣地に配備された、日本陸軍の大砲の種類と数を、煩雑になるが確認しておこう。⁽³⁾

まず、独立攻城重砲兵第一大隊が三八式一五センチ榴弾砲を二三門。

同第二大隊が、四五式二四センチ榴弾砲を六門と四五式二〇センチ榴弾砲を四門。この部隊が当時の日本砲兵の中でも最新装備による中軸部隊と呼べるだろう。部隊の金看板は、日本陸軍の採用している移動式の大砲としては最大級で、しかも耐用性や命中率などに於いても優れた二四センチ砲である。砲の開発者、緒方勝一砲兵中佐が、この大隊を自ら率いた。

同第三大隊が、三八式一〇センチ加農砲を一二門。

同第四大隊が、二八センチ榴弾砲を六門。固定式の巨大な要塞砲を、青島前面までわざわざ運んできた。

独立攻城重砲兵中隊が四五式一五センチ加農砲を二門。

野戦重砲兵第二連隊が三八式一二センチ榴弾砲を二四門。

同第三連隊が三八式一五センチ榴弾砲を二四門。野砲兵第二四連隊が三八式野砲（口径は七五ミリ）を三六門。

山砲兵中隊が四一式山砲を六門。

これだけの砲門を並べ、一〇月三十一日、青島への総攻撃が始まった。ドイツ軍の青島要塞の最前面には、東から西に、小湛山堡壘、小湛山北堡壘、中央堡壘、台東鎮東堡壘、海岸堡壘が並び、その後方にイルチス南砲台、イルチス北砲台、台東鎮砲台が控え、もうひとつ後ろの要塞地帯ではいちばんの高地に、最大の火力を持つモルトケ山の砲台やビスマルク山の砲台が鎮座していた。たとえばビスマルク山の砲台には、四門の二八センチ榴弾

砲と二門の二センチ旧式砲が据えられていた。モルトケ山とビスマルク山を下れば青島の市街である。

戦いの実際はどのようなものであったのか。まず、青島要塞の要、ビスマルク山砲台のドイツ軍指揮官の日誌を、青島陥落後、日本側が入手し、翻訳したと称するものから引こう。

十月三十一日 早朝我砲から一発を放つ。敵は忽ち応射する。日軍の砲撃は巧妙を極め、我砲台に凡そ二十発の命中弾を受けた。戦闘は午前の七時から始まつて十一時迄続いた。司令部も一弾を蒙つた。露助の住居のやうに砲台は穴だらけになつた。何といふ凄まじい光景であらう。敵弾は殆ど間断なく我砲台と堡壘の上に炸裂するが、幸ひに火砲と兵士に損害はなかつた。余は頗る幸福であつた。余の面前に恰度六発の砲弾を受けたが、少しの負傷だも受けなかつた。敵弾の位置が最う四米突も吾人に近づいて居たら、恐らく此日誌を継続して書き得る事が難しかつたらう。⁽⁴⁾

初日に、ビスマルク山の砲台はかなり正確に砲撃されて、相当の損害を蒙つたことが分かる。翌日には日本砲兵の照準の精度は、ますます上がったようである。

十一月一日 敵は我前砲台に来つて、今日は盛に砲撃を継続して居る。吾人は立派に之に応射した。此の日に吾人の砲台が受けた弾数は四百四十八箇で、其内四十発は危い所に命中した。余の砲台は殆ど破壊されて了つた。午前八時に第二の砲架が全弾を受けて、一時戦闘を中止するの已むなきに至つた。(中略) 敵の砲弾は午前十一時半になつて御馳走を歇めて了つた。戦闘後砲台に行つて見ると、火砲は悲しむべき慘澹たる有様だ。何と云つて宜からうか。十二珊乃至十五珊の榴弾が一火砲の周囲に半円形を描いて落立して居る。此の榴弾が一時に爆裂し、而して我火砲が敵に砲撃を加へて居たら、恐らく吾人は聾者となつたであらう。⁽⁵⁾

この日はまだ終わらず、午後の部が続いた。

午後二時、敵は再び砲撃を開始した。是が為に吾人は火炮の下に任務に着かねばならぬことになった。而も其の時の火炮の凄まじい有様は何うであつたか。吾人は適當の詞を以て形容することが出来ぬ。一全弾は防楯を貫き、一門は戦闘力を失ふまでに毀れて居た。⁽⁶⁾

砲台は、この午後の砲撃で、ほぼ戦闘力を喪失したといつてよい。日本軍も戦果をよく把握したらしく、翌二日から四日は平穩であつた。ビスマルク山の砲台の最期は、五日に訪れる。

十一月五日 正午、敵の一火炮は我砲台を射撃した。吾人も之に応射したが、我背面にある敵の砲台からも打ち出して、終に吾人は敵の十字火に陥つた。午後命令を受領する。「我全弾を射撃し盡し、次いで工事を爆破すべし」。即ち余は我火炮を以て六十発を発射の後、火炮が已に戦闘力を失つたことを知り、其儘にして夕方から全砲台員は歩兵の陣地に進展した。⁽⁷⁾

退却は進展と表現されている。ともかく、青島防衛の要、ビスマルク山の砲台の砲兵や守備兵は、突撃してくる日本歩兵をひとりも見ぬうちに、戦闘力を喪失し、撤退を強いられたと分かる。

青島のドイツ軍が降伏したのは、一月七日、すなわち総攻撃開始から八日目である。

陥落後、伊勢喜之助砲兵中佐は、日本軍が砲撃目標としたドイツ軍陣地をめぐり、詳細にデータをとって、

『青島攻囲戦ニ於ケル彼我兵器ノ状態及彈丸効力調査』という報告書にまとめている。

まず、海岸堡壘はどうか。

本堡壘ノ掩体ハ我砲彈ノ為機関銃坐並監視壁悉ク破壊セラレ殆ド外斜面及内頂壁ノ形状ヲ存セザルモノ多シ。又永久掩蔽部ノ上面ニハ二十八珊鑄鉄破甲榴彈「ペトン」体三百耗貫徹シ上面二百耗ノ薄層ヲ剝脱セシメ其下面ニ損傷ヲ及ボサズ。⁽⁸⁾

次に台東鎮東堡壘はどうか。

機関銃坐ハ七箇ヲ有スルモ僅ニ一箇ヲ存スルノ外悉ク破壊セリ。(内部ハ)其大部ヲ破壊シ砲撃間守兵ノ占位スルコト能ハザラシメタルノ感アリ。外斜面ハ殆ド漏斗孔ヲ以テ充サル。永久掩蔽部ノ上面ニハ二十四榴命中彈アルモ上層ナル割石ノ混合堆土ノミニ達シ「ペトン」体二及ボサズ。⁽⁹⁾

そして中央堡壘はどうか。

掩体(中略)ハ其大部分ヲ破壊シ外斜面ハ漏斗孔ヲ以テ充サル。十五珊榴破甲彈ノ不発彈内頂ノ鉄骨「ペトン」体ヲ貫通シ直後ノ爆裂防護用鉄骨「ペトン」体壁後方鉄骨ニ至リ停止セリ。(中略)二十珊榴破甲彈永久掩蔽部上面ニ的中シ上部六百耗ノ上層ニ漏斗孔ヲ開キ尚「ペトン」体ヲ四十耗剝脱セリ。⁽¹⁰⁾

さらに小湛山北堡壘はどうか。

内斜面ハ殆ド彈痕ヲ以テ充サレ其形状ヲ存セズ。永久掩蔽部「ペトン」体ニハ損害ヲ与ヘズ。⁽¹¹⁾

砲台については、ドイツ軍が破壊してから撤退しているので、砲撃効果の判定が困難とはいえ、それでも伊勢中佐は、台東鎮の西砲台、ビスマルク山の北砲台、イルチス山の東砲台などに、「我が射弾」によって破壊された大砲の姿を認めている。⁽¹²⁾

この伊勢中佐の報告に従うならば、青島戦は砲戦でほとんど決着がついていたと考えられる。分厚いペトン（コンクリート）への砲弾の効果はしばしば物足りなくはあったものの、日本歩兵が「魂の突撃」をなす前に、砲台も堡壘も、事実上、廃墟と化し、機能を喪失していた。

この戦果を実見した伊勢中佐は、報告書を次のようにしめくくっている。

以上彈丸効力ヲ各堡壘砲台ニ付之レヲ実査セルニ我砲兵ノ目標トシテ射撃ヲ規正セシ堡壘内火線ニ対シテハ射彈密集シ其効力威大ニシテ殆ド之レヲ粉碎シ其外形ヲ失ハシメタリ。之レガ為、常ニ守兵ヲシテ火線ヲ占位セシムルコト能ハザラシメタルヤノ感アラシム。蓋シ其主因他ナシ。一ハ砲兵射撃術ノ進歩ト日露戦争当時ヨリ極メテ火砲精度ノ良好ナルト彈丸ノ所有大ニ豊富ニナルニ依ルナラン。即チ本要塞攻囲戦ニ於テ攻城砲兵ノ発射セシ総鉄量ハ一六〇一噸二三八ニシテ旅順攻囲ノ全戦役ニ消費セシ発射総鉄量ノ約二・五分ノ一ナリトス。⁽¹³⁾

二・五分ノ一、すなわち四割である。日露戦争の足掛け六ヵ月に及ぶ旅順攻城戦で日本軍の放った砲弾は、総

計二万五一発とされる。⁽¹⁴⁾ 対して伊勢中佐の報告書に掲載された「青島攻城戦ニ於ケル各目標ニ対スル発射弾数」の総計は四万三〇一九発である。数だけだと二割になる。しかし、大口徑弾が多いので、総鉄量で計算すると、旅順攻城戦の四〇〇〇トンに対して四割という。青島の一週間で旅順の数カ月の四割の目方の砲弾が消費されたのである。

火力の差で勝敗が決したことは、ドイツ側も認める場所であった。日本軍の捕虜となった青島総督のマイヤー＝ヴァルデック海軍大佐は、門司に向かう護送船内で、新聞記者のインタヴューに応じ、青島戦をこう総括している。

余をして忌憚なく日本軍の批評を試ましむれば、日本軍の長処は大砲の射撃と斥候の明敏と又先きに語りし如く塹壕の穿ち方の巧妙にあり、歩兵の小銃射撃は幾分の遺憾なき能はず、是れ日本軍の短処なるべきが、日本軍の疾風の如き呐喊は眞に世界の其比を見ざる所なるべし。⁽¹⁵⁾

日本軍の勝因は第一に優勢なる砲撃にあった。歩兵戦、接近戦では技量の不足を感じた。そして、歩兵が突撃してくる際の勢いについて、日本陸軍への国際的定評をふまえ、社交辞令的に付加されている。そのような感想と解される。

これは日本陸軍に対する批評として新しい。なぜなら、十年前の日露戦争での日本陸軍は、火力が不足しても歩兵の突撃に徹し、肉弾戦、白兵戦に持ち込む精神主義的戦闘法で世界に知られていたのだから。先の引用を結ぶマイヤー＝ヴァルデックの「日本軍の疾風の如き呐喊は眞に世界の其比を見ざる所なるべし」という文言は、そのような評価を意識しているのであろう。

たとえば、日露戦争に於いてクロバトキン將軍は、回想録にこう記している。

戦時日本軍ニ從軍シタル英國ノハミルトン中將ハ『日露戦争ニ於ケル參謀官日記』ト題スル著書ニ於テ日本陸軍ノ大隊ハ其ノ性質ニ於テ欧州陸軍ノ大隊ヲ凌駕スト断定シ日本軍ノ特性ヲ評シテ曰ク『政府ハ日本兵ガ其ノ母ノ乳ト共ニ吸取シタル愛国心ニ接種スルニ制先、機敏、深慮ヲ以テセント努メタリ。此ノ如キハ武勇ヲ以テ教科ノ首目トスル学校ニ於テノミ行ハルベシ』ト。⁽¹⁶⁾

クロバトキンはつづいて作家トルストイの日本軍評にもふれる。

(日本人ヲ) 最モ激賞シタルハトルストイ伯ナリトス我ガ国ノ偉大ナル著作家兼哲學者ハ(中略) 日本軍ノ我ガ軍ニ対シテ勝ヲ制シタルハ日本人ガ目下武勇的愛国心ト有力ナル主權トニ由リテ世界ニ於ケル最強ノ人民ト為リ陸海共ニ何人ニモ破ラレタル民タルニ因ルト論斷セリ。⁽¹⁷⁾

そしてクロバトキンは「前述スル所ニ依レバ戦争前吾人ガ物質力就中精神力ヲ評価シタルノ不十分ナルコト明ナリ」⁽¹⁸⁾と自らの不明を恥じて、日本軍に対する評価を結ぶ。日本軍の旺盛な精神力と捨て身の突撃には神がかった恐ろしさがあるという、一九四五年まで、最後にはカミカゼという言葉とセットにされて続いてゆく神話は、『クロバトキン回想録』をはじめとする日露戦争の記憶から、主に作り上げられたと言つてよい。

しかし、青島戦の展開と結末は大きく違っていた。そもそも日露戦争で日本陸軍は、突撃すれば弾が足りなくとも勝てるという「狂信的精神主義」に、はじめから取りつかれていたわけではない。乃木の人命軽視の突撃は、

弾丸の不足ゆえのやむをえざる選択であった。物が足りないのにどうやって戦争を続けるか。そこに登場せざるをえなかったのが、捨て身の精神主義、「魂の突撃」であった。

けれども、一九一四年の青島なら、弾が足りた。日本陸軍の物的状況は、日露戦争時よりも大幅に改善されていた。日露戦争では不可能であった、火力、物量、科学力を優先させ、精神力の目立つ暇のない、近代戦の見本が青島で示された。しかも、近代戦は物量戦でしかありえないことを世界的に証した第一次大戦の一環として。ところが、この青島の戦訓は、一九四五年までの日本陸軍の歴史に反映したとは言いがたい。むしろ大正後期以後、日本陸軍は「魂の突撃」を絶対化し、精神主義に過度に依拠する道を歩んだのである。その理由の解明が次の課題となる。

(1) そのような従来の見方を覆す研究に、参謀本部が編纂刊行した『秘 大正三年日独戦史』(一九一六年)の復刻出版本に別巻として付された、斎藤聖二『日独青島戦争』(ゆまに書房、二〇〇一年)がある。本稿は伊勢喜之助の資料を用いてそれに些か裨さす程度のものにすぎない。

(2) 桑木崇明『陸軍五十年史』、鱒書房、一九四三年、二七七頁。

(3) 伊勢喜之助『青島攻囲戦ニ於ケル彼我兵器ノ状態及弾丸効力調査』(陸軍技術審査部、一九一四年)による。

(4) 『青島戦記』、朝日新聞合資会社、一九一五年、一九八頁。

(5) 同右、一九八一—一九九頁。

(6) 同右、一九九頁。

(7) 同右、一九九—二〇〇頁。

(8) 伊勢前掲書、頁数なし。

(9) 同右、頁数なし。

(10) 同右、頁数なし。

- (11) 同右、頁数なし。
- (12) 同右、頁数なし。
- (13) 同右、頁数なし。
- (14) 陸軍省編『日露戦争統計集』(一(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計) 改題) 第二二卷(原書房、一九九五年)の二三―二三七頁を参照のこと。
- (15) 『青島戦記』、一九三頁。
- (16) 『クロパトキン回想録』、参謀本部訳、東京偕行社、一九一〇年、二七〇頁。
- (17) 同右、二七一頁。
- (18) 同右、二七一頁。